

森本
あんり



国際基督教大学（人文科学科）教授。
1956年神奈川県生まれ。
プリンストン神学大学卒（Ph.D.）
著書に「ジョン・エドワーズ研究」（創文社）、
「キリスト教は他宗教をどう考えるか」（教文館）、
「現代に語りかけるキリスト教」
「キリスト教は同性愛を受け入れられるか」
（ともに日本基督教団出版局）など。

だれもが一度は聞いてみたい 18の質問

Morimoto Anri

Question

1

「クリスチャン」と「キリスト教徒」と「キリスト者」というのはみな同じですか。

指示対象としては同じです。あえてニュアンスを区別すると、「クリスチャン」は英語由来で、本人が言うにはちよつと気恥ずかしい、「キリスト教徒」はそうでない人との対比における客観的な言い方、「キリスト者」は一応自分のことを言うときにも使える少し気張った和製語、くらいでしょうか。

ただ、カトリックの方は自分を、「クリスチャン」というより「カトリック」と呼ぶことが多いようです。だからカトリック諸国で「ク

リスチャン」というと、プロテスタントのことです。ほかに「キリスト信者」「キリスト信徒」という言い方もありますが、「キリスト教者」とは言いません。

Question

2

キリスト教徒になる人って、どうしてキリスト教を選んだのですか。

じつのところ、キリスト教にかぎらず、「自分で宗教を選んだ」という人は少ないと思います。地域や家系で宗教が色分けされているところでは、そのなかに生まれ育つわけですから、とくに自分でそれを選ぶわけではありません。

そうでない人にとっては、偶然 99

ともいえる出会いが、大きな要素を果たします。たまたま教会が近隣にあつたから、たまたま学校で知り合ったあの先生やこの友達の影響などで、事情はさまざまでしょうが、いずれも出発点には「出会い」があります。諸宗教の違いを研究してこれにしよう、と決める人もあるかもしれませんが、客観的な比較研究だけで信仰が芽生える、ということはありません。

「出会い」は、自分で作り出したを選び取ったりするものではなく、ある日ある時むこうからやってくるものなのです。

Question

3

教会って、信者でない人でも行っているのですか。

はい。日曜日の礼拝は、どの教会でも、信徒であるなしにかかわらず、すべての人に開かれています。礼拝では讃美歌を歌ったり説教を聞いたりしますが、はじめ

て行く人は、あまり固く考えずに、ただまわりに合わせて立ったり座ったりしていればいいでしょう。献金のときも、親切にあなたをやりに過ごしてくれるはずですよ。

礼拝の意義は、しばらく通ってみればわかってきます。しかし、教会は聖人君子の集まりではありません。よく見てみると、どうやらひと癖もふた癖もありそうな連中ばかりだ、ということもわかってくるでしょう。キリスト教は、そういう欠けだらけの人間の集団が、なお神の恵みや祝福の伝達手段となり得る、ということを感じた宗教です。「土の器」に「神の宝」が盛られる、という信仰です。

Question

4

洗礼を受けないと、キリスト教徒になれないのですか。

一般にはそのとおりです。「生まれながらのキリスト教徒」というのは、この2千年間、世界にただ

の一人も存在しませんでした。たとえ幼児洗礼でも、一人前の信徒になるためには、成人してからの自発的な決断が必要ですよ。

ただし、プロテスタントの一部には、無教会やクエーカー派など、儀式としての洗礼を行わないところもあります。その場合にも、「自分はキリスト教徒である」というためには、人々の前で公に信仰を告白することが必要です。その信仰告白によって、ある特定の信仰共同体のなかに迎え入れられます。ということとは、もつと簡単にいうと、だれも自分ひとりでキリスト教徒になることはできない、ということです。この点は、おそろしく仏教徒にもイスラム教徒にも共通するでしょう。

Question

5

心のなかで信じているだけではだめなのですか。

聖書的な考え方では、心に信ず

ることと口で告白することとは表裏一体です。もし神が人間の心理的事実にすぎないのなら、心のみで信心しているだけでもよいわけですが、そうではなくて、神は人間の一人相撲を越えた現実として、私の外に、私とは異なる意志をもつて存在する、というのがキリスト教の信仰なのです。

世の中には「愛があれば結婚なんて不要だ」という人もありますが、結婚はその愛を公に表明して、将来にわたるコミットメントを約束する行為です。洗礼もそれに似ています。

ついでに余計なひとことを加えれば、人間の愛なんて、純粹さだけでそんなに長続きするものじゃありません。結婚は、その毀れやすい愛を守り育ててゆくための、その制度なのです。信仰も同じで、その脆さの感覚が、洗礼を必要とします。

処女降誕って、ほんとに信じられているんですか。

イエスの母マリアの処女性は、過大に扱われるか過小に扱われるかのどちらかの場合が多いのですが、聖書自身の扱いはいたって冷静です。

新約聖書には福音書が四つありますが、処女懐胎に触れているのはマタイとルカの二つだけです。あとの二つの福音書にとって、イエスの福音はそれなしにも完全に語ることができるともなりました。

また、使徒パウロはマリアの処女性について、時に危ういほど無関心ですし（ローマ一・3など）、初代教会の基本信条でも、「ニカイア信条」などはこの点にまったく関心を示しません。

キリスト教の信仰にとって大切なのは、イエスの誕生の生物学的な特異性ではなく、神の子がひと

りの人間としてこの世に生まれた、という事実の不思議さそのものです。処女懐胎は、その事実を指し示す「しるし」の一つです。

Question

7

では、復活はどうですか。

イエスの受難と死と復活は、四つの福音書全部に記されています。したがって、復活の信仰なしに福音は成立しません。ただ、「復活を信ずる」といっても、誤解されることが多いと思います。

仮に、近未来にタイムマシンが発明されたとして、おなじみ〇〇テレビがイエスの復活の決定的瞬間を撮ろうと、彼が埋葬された墓穴にそっとテレビスクープを差し入れたとしましょう。おそらくその企画は、残念ながら（いつもと同じように）不首尾に終わるしかないと思います。

なぜなら、復活は蘇生ではないからです。この世へと生き返るこ

とではなく、新しい生への出発だからです。聖書が記すイエスの復活は、時空のなかに顕現しつつも、それを超えています。それがどんな生なのか、本当のところ私たちにわかりません。私たちが辿り得る事実、「イエスの墓が空だった」という記録までなのです。

東方教会のイコンに、復活の出来事を描いたものがないのもそのためです。

Question

8

キリスト教では、人間の性をどのように見えていますか。

日本ではキリスト教というと、厳格で禁欲的なイメージをもつ人が多いようですが、それはおそらく、司祭の独身制や修道院を思い浮かべるからでしょう。しかし、カトリックとプロテスタントとを問わず、キリスト教は肉体や性を人間の本質的な構成要素の一部と考えます。精神と肉体を分ける二

元論は、むしろギリシャ起源で、聖書的な人間観とは相容れません。だいいち、いくら精神が清らかになっても、私たちの苦しみ悩みの多くは生身の肉体にかかわることですから、それを正面から見据える目がなければ、現実的な救いにはならないでしょう。

聖書は、人間の性がかぎりない祝福と喜びの源であると同時に、果てしない罪の淵ともなり得ることを知っています。その両義性を生き抜くことに、人間のチャレンジがある、というのがキリスト教の見方です。

Question

9

祈るって、どういうことですか。

哲学者のカントは、祈ることに意味を見いだしませんでしたが、それは彼の神観に由来しています。「祈り」が有意義な行為として成立するためには、「神の自由」の認識が不可欠です。もし神が運命の

ように決まったことの遂行者であるだけならば、人間が祈りによってそれを変えようとするのは無駄でしょう。逆に、もし神が人間の願うままにあれこれの祈りを叶えてくれるだけの存在であるなら、神は神ではありません。どちらの場合にも、神の自由が見失われています。祈りは、自由なる神への語りかけです。

それから、祈りにはもう一つ、存在の「ありがたさ」に対する、日常的な感謝の感覚が含まれています。カトリックの井上洋治神父は、困ったときの神頼みばかりでなく、ちょうど「日なたぼっこ」をするように、神さまの温かいまなざしを全身に浴びてのんびりとたたくような祈りがある、と語っておられます。私も同感です。

Question

10

牧師と神父はどう違うのですか。

このように聞かれて、ああ牧師

はプロテスタントで、神父はカトリックです、と答えるのがまず第一段階です。いろいろときれいな祭服を着ているのが神父さまで、

牧師はどちらかというと黒のそつけない服だ、という見分け方もあります。ただ、「神父」は信徒が呼びかけに使う「呼び名」で、職位としては「司祭」です。しかも、「司祭」という用語は、プロテスタントでも聖公会などでは使われるので、ややこしくなります。さらにもう一步進んで考えると、牧師は一つの職務ないし資格ですが、司祭は身分ないし位階（ヒエラルキー）です。

プロテスタントでは、ルター以来「万人祭司」という考えがありますので、牧師も基本的には専門教育を受けたひとりの信徒にすぎません。これに対して、カトリックの司祭は秘跡による特別な恵みを受けた人で、終生にわたって信徒とは別の生活を送ります。自身

制もその一つの表現です。

Question

11

聖職者にはどのような生活がなされるのですか

プロテスタントでもカトリックでも、聖職者になるにはまず信徒としての生活がなければなりません。

本人の決心（召命）の後、教会の推薦を受けて神学校に進みますが、神学校は制度上は、大学や大学院であることもあれば、各種学校に分類されることもあります。もともと一般的なものは、そこで数年の専門教育を受け、各教派の教師検定試験に合格して教職者になることです。教派により、はじめは説教をする資格だけ与えられ、さらに数年後に、ようやく一人前の資格を与えられるところもあります。もつとも、バプテスト派のように、こうした面倒な手続きも時間

も必要なく、一つの教会がある人をいきなり牧師として認めればそれでよし、というところもあります。よく西部開拓時代の映画には、聖書も読めない説教師が出てきますが、そういうことも起こり得たでしょう。逆にカトリックでは、この期間と段階がより長く詳細に定められています。

Question

12

女性も聖職者になれますか。

なれません。長い不平等の歴史の後に、20世紀になってようやく女性教職者を認める教会が増えてきました。今ではプロテスタントの諸教会は、だいたいどこでも認める傾向にあります。しかし、カトリック教会と東方教会では、まだ認められていません。一般に、聖職者に位階がある教会では、上にゆくにしたがつて、教会内に反対の声が強くなります。カトリック教会に女性の教皇が誕

生するのは、まだまだ先の話でしょう。

今日ではさらに、同性愛者を聖職者として認めるかどうかで、諸教会の議論が続いています。

Question 13

聖職者は、どのように生計を立てているのですか。

いろいろなケースがあります。プロテスタントで一般的なのは、教会員が献金をして、牧師に給与(謝儀)を支払うことです。

アメリカや韓国などの巨大教会では莫大な額をもらう牧師もありますが、逆に小さな教会では、教区や教団から補助を受け、ようやく一定基準を満たす場合もあります。また、牧師が他の職業を兼ねて自給していることもあります。一方、カトリックの司祭には家族を扶養する必要がないので、基本的には個人の生活のために定額を支給されるだけです、必要が

あればより自由にもらうことができます。

Question 14

キリスト教は愛を説くのに、なぜ信者同士でアイルランド問題のような宗教戦争が起きているのですか。

ほんとにそうですね。傍から見てそれを情けなく思わない人はいないでしょう。ただ、それはやはり第三者的な発言であって、当事者たちには私たちの容喙(ようかい)を許さないほどの、根深い事情があるのだと思います。

いわゆる「宗教戦争」一般に引けることですが、宗教そのものが引き金になって起きることは多くありません。むしろ政治や経済など、それ以外の要因が対立の発端になり、それを正当化したり煽り立てたりするために、宗教が使われるのです。

では、宗教はそれを終わらせるために何かできないのか——本當

の問いは、むしろこちらでしょう。当該宗教の内部から、その行為や態度を考え直す声が出てきてほしいと思います。そのために必要なのは、宗教間ではなく、まずは宗

Question 15

教内の対話なのです。

の問いは、むしろこちらでしょう。当該宗教の内部から、その行為や態度を考え直す声が出てきてほしいと思います。そのために必要なのは、宗教間ではなく、まずは宗

Question 16

教内の対話なのです。

いいえ。そう思っている人はキリスト教徒のなかにも多いのですが、そういう人は聖書をもう一度よく読んでみてください。偶像礼拝とは、神ならぬものを神として拜むことですが、聖書で非難されているのは、他宗教の人々ではなく、他宗教の神々に心を惹かれる自宗教の人々です。

古代東方の世界では、それぞれの民族にそれぞれの神があるということは、自明の事実として前提されていました。強大な民族には、強大な神がいます。弱小民族のイ

スラエルにとっては、これがなかなか魅力的だったでしょう。「偶像礼拝」とは、いわばそれに色目を使う同輩に向けられた言葉です。

新約聖書でも、事情は基本的に同じです。他の神々は、自分の信仰に危機をもたらさかぎりにおいて偶像となるのであって、他の人が他の神々を拜むことは、基本的に聖書的関心の埒外です。

キリスト教徒はみな、自分の宗教がいちばんだと思っているのですか。

はい。ただし、それはキリスト教徒にかぎりません。

すべての宗教は、「絶対宗教」として生まれます(トレルチ)。つまり、個々人の信仰の出発点においては、その宗教こそが自分の救いになる、と確信して信ずるわけですから、「他の宗教のほうがよい」とも思わないでしょうし、「どの宗教でもかまわない」とも思わない

でしょう。

それは、幼稚園の子どもが「私のお母さん、世界一よ」と言うのと同じです。その子どもが言いたいのは、「お母さん大好き」ということです。

そのような素朴な信頼や愛がなければ、そもそも何かを信ずるという事態が成立しないでしょう。しかし、それは他宗教との比較における「絶対」や「世界一」ではありませんし、他の人の同じような発言を排除することでもありません。

宗教の信仰は、いつでも比較級ではなくて最上級です。自分にとって自分の信仰の「かけがえのなさ」を知っている人は、他の人にとっても、その人の信仰が大切であることを思いやることのできる人です。

逆にいえば、寛容は、宗教への無関心からは生まれません。

Question 17

信者じゃなくても、キリスト教の結婚式が挙げられるのはなぜですか。

最近の統計では、キリスト教式の結婚式が日本人の挙式の半数を上まわったというのですが、これはやはりホテルなどに作りつけの、いわゆる「チャペル」式場の商業戦略によるところが大きいでしょう。

しかし、教会での結婚式は、お金さえ払えばだれでもできる、というわけではないと思います。カトリック教会では、当事者双方が信者であるときにのみ、超自然的な絆によって結ばれる秘跡としての結婚が成立します。プロテスタント教会では対応にはらつきがありますが、一般に教会で式を挙げるには、当事者がなんらかの仕方です、その教会の交わりのなかにあることが条件になります。

それはなんといつても、教会が一つのコミュニティだからであり、結婚式が一つのコミュニティ・イベントだからです。まったく見ず知らずの人が飛び込んできても、どう祝福してあげたらよいかかわらないでしょう。

ちなみに、お葬式ではその要素がもつと強くなります。身寄りのない人のためならともかく、見知らぬ人のお葬式をおいそれと引き受ける教会がないのも、そのためです。

Question 18

キリスト教では、死後の世界をどのように考えるのですか。

宗教というと、葬式や死後の世界の話だ、と思う人は日本でも外国でも少なくありません。聖書の人々は、死後の世界を専門に扱うお隣のエジプト文化をよく知っていました。

しかし、キリスト教は本質的に「生ける者の宗教」です。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか」(ルカ二四・5)や、「死人を葬ることは死人にまかせておきなさい」(ルカ九・60)というイエスの言葉が、それを証しています。

一見冷たいようですが、その本意は、この世をどう真剣に生きるか、ということ。「死んでからではなく、今、この世に生きている間に従ってきなさい」という招きです。

じつは、このような考え方は、孔子やお釈迦様の教えにも共通しています。だれも死後の世界を見てきた者はいないわけですから、それがどんな世界かを得々と語るのはまやかしです。

宗教が死後の世界のことを専売特許のように売り物にしはじめるとき、その宗教は頹落します。